

西村玲著

## 『近世仏教論』

大橋幸泰

本書は二〇一六年二月に四十三歳という若さで急逝された

西村玲氏の遺著である。評者は残念ながら著者の生前に直接お目にかかることはなかったが、新進気鋭の近世仏教思想研究者である著者に注目していた。仏教とキリシタンの両方を視野に入れた思想史研究者である著者は、これまで浄土真宗やキリシタンをめぐる問題を題材に近世日本の宗教問題を考えてきた評者にとって、さまざまな議論ができる相手となつたはずである。その前にその望みが完全に絶たれてしまったのは、痛恨の極みという他はない。

このたび幸運にも、著者の遺著について書評の機会を与えられた。とはいえ評者にとって思想史は得意な分野ではなく、本書の豊かな論点をすべて理解できとは思えないが、評者が理解した範囲で、著者との最初で最後の対話を試みたいと

思う。

本書の構成は以下の通りである。

第Ⅰ部 近世仏教の展開

近世仏教論

教学の進展と仏教改革運動

第Ⅱ部 明末仏教と江戸仏教

慧命の回路―明末・雲棲株宏の不殺生思想―

虚空と天主―中国・明末仏教のキリスト教批判―

東アジア仏教のキリスト教批判―明末仏教から江戸仏教

へ―

明末の不殺放生思想の日本受容―雲棲株宏と江戸仏教―

第Ⅲ部 キリシタンと仏教

## 近世思想史上の『妙貞問答』

近世仏教におけるキリシタン批判―雪窓宗崔を中心に―  
仏教排耶論の思想的展開 近世から近代へ―

## 第IV部 教学の進展

中世における法相の禪受容―貞慶から良遍へ、日本唯識  
の跳躍―

可知と不可知の隘路―近世・普寂の法相批判―

## 第V部 伝統から近代へ

釈迦信仰の思想的展開―『悲華経』から大乘非仏説論

へ―

須弥山と地球説

## 第VI部 方法と実践

「近世的世俗化」の陥穽―比較思想から見た日本仏教・

近世―

中村元―東方人文主義の日本思想史―

アボカドの種・仏の種子―仏教思想は環境倫理に何がか

きるか―

西村玲略歴・業績目録

あとがき（末木文美士）

第I部「近世仏教の展開」は、本書の総論にあたる。近世

第III部「キリシタンと仏教」は、日本においてキリシタンを受け止めた近世仏教の展開について検討している。中国におけるその役割は儒教が担ったのとは対照的である。当該期キリシタンを推進する側からの代表作が、日本ではハビアンの『妙貞問答』であり、中国ではマテオ・リッチの『天主実義』であったとされる。それはキリシタン布教活動の中心であったイエズス会の現地適応主義の成果だという。一方、反キリシタンを掲げる日本の仏教勢力は、明末の中国仏僧によって見出された「虚空の大道」に依拠してキリシタン批判を展開した。その代表が雪窓宗崔であった。ところが十九世紀に入ると、キリスト教批判における「虚空の大道」という全体的な世界観は失われていくとされる。西洋勢力の脅威を前提に幕末維新时期では、その批判の中心は五倫や人倫といった人間社会の倫理の問題に限定されていくという。こうして、前近代では形而上的領域を担っていた仏教から、近代哲学の領域が分離していったというのがここでの見通しである。

第IV部「教学の進展」は、中世における学僧の貞慶と良遍がいかにして禪を受け止めたかという課題と、近世における学僧の普寂がいかにして大乘非仏説論を受け止めたかという課題を検討している。それぞれ検討の時代も内容も異なるが、これらに共通しているのは仏教思想の歴史も時代状況と無縁

仏教思想史を前期・中期・後期に分けて、それぞれ次のように概観している。近世前期では、キリシタン禁制に促されて固まった寺檀制度と、幕府の仏教統制に伴って整備された本末制度によって、仏教の復興が達成された。それは、各宗において教学研究を行う檀林が整備され、組織的な仏教研究が進められたことに表れているという。近世中期では、仏教文献の研究が進展する中で古代インドの釈迦仏当時の仏教を再現しようとする志向性が高まったとされる。そして、近世後期では、知識人の支持を失った仏教思想は、大乘非仏説論や須弥山説否定論のような科学的排仏論への対応という新たな段階を迎え、近代化への道を進むことになったという。

第II部「明末仏教と江戸仏教」は、近世仏教思想に影響を与えた、明末の中国仏僧の思想について検討している。創造主による来世救済を説くキリシタンに対して、明末仏僧の株宏・円悟・通容は無始無終のキリシタンの神＝「天主」の存在を否定した。彼らはキリシタンとの対抗関係の中で、仏教の世界観を自覚したとされる。そうして到達したのが、「虚空の大道」という仏教の普遍性であった。それは、鳥原天草一揆（一六三七―三八）後に長崎で排耶説法を行った、日本の臨済僧である雪窓宗崔のキリシタン批判にも援用されたという。

ではないことを示したことである。前者は仏教の教学研究を重視して実践が軽視されていたという時代状況を、後者は近代的な合理性が追求され始めた時代状況を表しているという。

第V部「伝統から近代へ」は、近世期に起こって近代初期まで議論された、大乘非仏説論と須弥山説否定論について検討している。前者は大乘仏教は釈迦仏が説いたものではないとする説、後者は仏教思想による宇宙の全体構想である、須弥山を中心とした宇宙観を否定する説である。両者とも合理的な思考方法が進展した近世期に大きな論争が起こった。いずれも近代の仏教思想において主流となるが、宗教上の理念に関わる議論だけに、決着がつくまで長い時間がかかった。その結論部分において仏教者は、前者については信仰と歴史を、後者については信仰と科学を、それぞれ切り離すことによつて理解することになったという。

第VI部「方法と実践」は、近世仏教思想研究が新たな地平を切り開く可能性について検討している、と評者は理解した。論点は多いが、ここで確認できるのは、近世が世俗化の時代だといっても一括りにはできないこと、ヨーロッパ中心主義を相対化するべきこと、近世仏教思想に現代の環境問題解決のヒントを得られる可能性があること、を主張していることである。

以上の要約から明らかのように、著者の論点は多岐にわたっており、すべてに適切なコメントをすることは難しい。ここでは、評者が理解するところから、本書の重要な論点として次の三点をあげたい。

第一は、近世仏教の教学発展の契機について、キリシタン（キリスト教）という他者が触媒となったとされていることである。仏教を担う人々は、近世を通じて一貫してキリシタンに批判的態度をとり続けた。そうした排耶論を通じて彼らは、仏教教学を自己点検した。とりわけ、十七世紀ではキリシタン宣教師との対決の中で、十九世紀では西洋勢力との接触とキリスト教再布教の脅威の中で、仏教が目指すところは何かが問われたと思われる。

自分とは異なる他者の登場が自己のアイデンティティの自覚を後押しするというのは、一般的にいくらでも事例があるだろう。しかし、ここで著者の優れている点は、キリシタンを批判する排耶論やそれによる変容を一括りにせず、十七世紀段階のものと十九世紀段階のものとの差異を強調していることである。前者では「虚空の大道」という仏教の普遍的な世界観が自覚されたとし、後者では近世仏教思想から近代哲学の分節化が促された、と著者は指摘する。仏教思想の分析も、それぞれの時代状況を意識せずにはありえないとの主張は重

要である。

第二は、近世後期における仏教思想の新たな動向について、他分野の復古主義と関連させつつ議論していることである。幕藩体制の矛盾が深まりつつあった十八世紀後期以降、日本の内在的心性を解き明かそうとする国学の潮流が生まれ、地誌や歴史書の編纂が始まったりしたのは、人々が現実の諸問題に対してその解決のヒントを過去の人々の営みに求めようとしたからであろう。著者は近世仏教を担う人々もその動向の中にあつて、古代インドの釈迦仏にまで戻って仏教思想の原点を確認する志向が高まったと指摘する。その延長線上に大乘仏教は釈迦仏が説いた説ではないとする大乘非仏説論が強調されることになる。

ただし、十八世紀にこの議論の中心となった普寂は、「娑婆にふさわしい教えは小乗であり、大乘仏教は聖者の瞑想中で密伝されたもの」と考えたという（二九九頁）。これについて、これまで「未熟な近代的合理性」と理解されてきたが、著者の主張は近代的な合理性という基準で評価するべきではなく、近世仏教思想史の脈絡の中で位置づけるべきというものである。

第三は、仏教思想の近代的変容について、合理性・科学性との関係で新たな解釈が生まれたと主張していることである。の時代状況に応じて変化していったことが明快に示された。近世の仏教を担う人々も変転する社会の動向の中で矛盾を抱え、苦悩し、そしてその解決のために知恵を絞った。そこに豊かな思想的営為がある。著者の研究は近世仏教が決して停滞していたのではなく、ピピッドに展開していたことを証明したという点で、近世宗教史研究に新たな段階をもたらしたといえる。

最後に著者の研究成果をもとに、もう少し議論してみたい点として、近世仏教思想と民衆との関係をあげたい。この点について評者のコメントを二点示す。

第一は、キリシタンを触媒として近世仏教思想が展開していったという点についてである。近世仏教の担い手がキリシタンに対抗しつつ、仏教の独自性について自覚を深め、その思想を時代に適合させていったとの指摘はその通りだと思う。そうだとすれば、近世仏教とキリシタンは決して共存できないことになる。近世に生きた人々は仏教がキリシタンかの二者択一を迫られ、幕府の宗教政策のもとに仏教の方を選ばざるを得なかったということになるが、仏教とキリシタンは共存できない宿命であったと考えるべきだろうか。

著者が明らかにした仏教思想は治者の側に立つ学僧によるものである。学僧や知識人にとっては、仏教とキリシタンは

この契機となった議論が大乘非仏説論と須弥山説否定論であった。近世仏教思想も諸学（この場合は考証学と自然科学ということになるか）の進展の影響から逃れられなかったということになる。ただし著者は、仏教思想として、大乘仏教や須弥山の宇宙観が何の意味もなかったとしているのではない。前者については先に見たように、瞑想中に釈迦仏から聖者に密かに伝えられたものであったと考えられたから、むしろ大乘仏教を守ろうとする志向性がある。後者については、近世を通じて展開した議論の中で須弥山の宇宙観は幕末期には民衆まで知られるところとなり、実際、須弥山儀という模型まで登場した。須弥山の宇宙観は、自然科学を根拠とする地球説から見れば荒唐無稽に見えるものであったとしても、幕末期における西洋勢力の脅威に対して人々が求めていた、西洋社会とは別の価値観の一つと位置づけられる。

両者いずれも釈迦仏の時代である古代インドへの回帰を志向しつつ、それぞれの思想的模索の中で、前者は信仰と歴史の分離、後者は信仰と科学の分離が図られた。結果、全体的には大乘仏教も須弥山世界も仏教者の瞑想として仏説であるとされつつ、仏教思想が近代の秩序に適合するよう変容していったという。

右にあげた三つの論点を通じて、近世仏教思想はそれぞれ

共存できないという立場であったであろう。しかし、被治者の側に立ってみると、それは決して不可能というのではなかったのではないか。実際、よく知られているように近世日本では潜伏キリシタンが存在した。彼らはキリシタンの他に、仏教・神祇信仰・民俗信仰などさまざまな宗教活動を併存して実践していた。評者の考えでは、キリシタンがそれ以外の宗教活動を行っていたのはカムフラージュであったとするべきでない。複数の宗教活動を併存して実践するのは近世人一般の常識であるからである。

もちろん、荒唐無稽な「切支丹」イメージの流布により、潜伏キリシタンを除いて民衆からもキリシタンは忌避されたことは確かである。しかし、仏教とキリシタンが共存不可能なのは治者の側の思想であって、被治者の生活においては共存可能であったのではないか。この評者の考えに著者はどのように応答しただろうか。

第二は、近世仏教思想の民衆への影響についてである。キリシタンとの対抗の中で学僧が見出した仏教の根本的な思想が「虚空の大道」という普遍的な世界観であった。「虚空」とは「物を妨げることも物に妨げられることもない」普遍的な存在であり、「大道」とは「始まりなく終わりなく、平等で浩然とした全き根元であって、個々人に内在する真理」で

立場にあったから、著者が明らかにした学僧による仏教思想が民衆にはまったく無縁であったとは考えにくい。近世仏教思想の豊かな思想的営為が、被治者の民衆にどのような影響を及ぼしたのか、著者の見解を聞きたかった。

残念ながら、これらの答えを永遠に著者から聞くことはできない。残された私たちが追究していくべき課題となるだろう。「冥福を祈る。」

(法蔵館、二〇一八年一月刊、A5判、四一八頁、

四八〇〇円＋税)

(早稲田大学教授 おおはし ゆきひろ)

あるから、「生物や世界を生成養育する根元」となるという(二〇八頁)。このような「日本と中国の禪僧が主張する世界の原理は、虚空のように世界に行き渡ると同時に自身に内在している真理」であり、それこそが「虚空の大道」だとされる(一七四頁)。だからこそ、雪窓は「現世と来世は、今の自身の行いのみが決める」のであり、「人の善き行為は、五戒から始まる」といい(一九三頁)。「受戒に促されて行自身の善業こそ、人々が求める現世安穩と後生善処への唯一の道」だと説く(一九四頁)。結局のところ、これは自力による救済となるのではないか。雪窓は念仏宗や日蓮宗にも批判的だったという。

ただし、この教えは学僧による教学研究の中で考え出された思想であり、まして自力による救済は日々の労働に追われる民衆にとって遠い世界の話であったようにも思える。評者は、この思想は民衆にとって難解であったのではないかと考えるが、その一方で、通俗道徳に通じる教えでもある。近世仏教思想と民衆との、距離や親和性をどのように考えるか。

著者の研究は、あくまで学僧を基軸とした近世仏教思想を対象とするものであるから、民衆との関係を問われるのは不本意かもしれない。しかし、近世の仏教者はキリシタンの防波堤として治者の側に立ちつつ、被治者の民衆と直接接する

鰐淵寺文書研究会編 『出雲鰐淵寺文書』

井上寛司編 『出雲鰐淵寺旧蔵・関係文書』

上 嶋 康 裕

両書は、現在も多くの貴重な文化財を残す山陰屈指の天台宗古刹である鰐淵寺（現・島根県出雲市）が所蔵する鰐淵寺

号、二〇一三年）、遅まきながら両書を紹介させていただく。本書二冊の構成は、以下の通りである。

文書と、寺外の鰐淵寺旧蔵文書、および関係文書を編年順にまとめた二冊の史料集である。二〇一五年に鰐淵寺文書研究会（代表久留島典子）編で刊行した『出雲鰐淵寺文書』には、慶長五年（一六〇〇）までの鰐淵寺所蔵の中世文書を編年順に収録する。二〇一八年に井上寛司編で刊行した『出雲鰐淵寺旧蔵・関係文書』には、金石文や寛文六年（一六六六）以前の鰐淵寺所蔵の近世文書と中世の鰐淵寺旧蔵文書および鰐淵寺外にある鰐淵寺関係文書を編年順で収録する。

鰐淵寺文書研究会編 『出雲鰐淵寺文書』  
出雲鰐淵寺文書 一〜三八九  
花押一覽  
（以下、第I部とする）  
井上寛司編 『出雲鰐淵寺旧蔵・関係文書』  
出雲鰐淵寺旧蔵・関係文書 一〜三二二  
解説  
花押一覽  
出雲鰐淵寺関係 編年史料目録

（以下、第II部とする）

第I部には、慶長五年以前の毛利氏領国時代までの鰐淵寺所蔵の文書を収録し、収録文書の花押一覽を付載する。

開催され、主な文化財が紹介された。

第II部には、鰐淵寺旧蔵の文書や、寛文六年以前の鰐淵寺所蔵文書、及び寛文七年出雲大社との「神仏分離」以前の寺外鰐淵寺関係資料を収録し、井上氏による解説と、花押一覽、編年史料目録を付載する。

今回の鰐淵寺文書・関係文書集全二冊が刊行される以前、鰐淵寺及び鰐淵寺文書研究は、以下のような経過をたどってきた。まず、鰐淵寺研究の嚆矢として、曾根研三編『鰐淵寺

の間、山岳信仰の観点から藤岡大拙氏が（『出雲の山岳信仰』『大山・石槌と西国修験場』一九七九年）、寺内構造の観点から平岡定海氏が（『出雲国鰐淵寺の成立について』『大前女子大学論集』一五、一九八一年ほか）、鰐淵寺文書を利用された。また井上氏は、杵築大社と鰐淵寺との具体的関係を一宮・一寺体制とする研究をはじめ（『出雲大社と鰐淵寺―中世出雲国一宮制の位置特質―』『山陰―地域の歴史的人格―』雄山閣出版、一九七九年ほか）、鰐淵寺文書研究を精力的に進められた。

文書の研究』（鰐淵寺文書刊行会、一九六三年）が挙げられる（以下、『鰐研』とする）。もちろん、現在の研究水準からすれば、文書の翻刻や内容理解の上で齟齬もあるが、鰐淵寺文書を周知した功績は大きい。と同時に、鰐淵寺のことを調べなければ、中世の杵築大社のことも分からないということも明らかにした。そのうち、一九七五年には、島根県教育委員会会の古文書調査の成果が『島根県古文書緊急調査総合目録』（島根県教育委員会）として刊行され、鰐淵寺文書が島根県立図書館でマイクロフィルムの形で一般に閲覧できるようになった。一九七八年には、島根県立博物館で鰐淵寺展が

一九九一年に、井上氏などで執筆された『大社町史 上巻』（大社町教育委員会、一九九一年）が出された。杵築大社と鰐淵寺との関係もまとめられた。

一九九七年には、鰐淵寺開創一四〇〇年を記念して『出雲国浮浪山鰐淵寺』（出雲国浮浪山鰐淵寺刊行会編、一九九七年）が刊行された。『大社町史 史料編』にも関わられていた井上氏により古代〜現代までの鰐淵寺史がまとめられ、さらに彫刻・絵画・工芸などの文化財や自然といった網羅的な記述がなされた。同年刊行された『大社町史 史料編 古代・中世』（大社町、一九九七年）には、千家家文書（杵築大社国造家のひとつ）や鰐淵寺文書も多く収録され、鰐淵寺

や杵築大社にかんする研究基盤が改めて整えられた。その後、井上氏をはじめ、佐伯徳哉氏（「中世前期の出雲地域と国家的支配」『日本史研究』五四二号、二〇〇七年ほか）や長谷川裕峰氏（「出雲国鰐淵寺と青蓮院門跡の本末関係」『佛教史學研究』五三二二、二〇一一年ほか）らによって、おもに鰐淵寺と杵築大社や延暦寺との関係について研究が進められた。

二〇一二年、鰐淵寺研究に画期が訪れた。まず、三月に井上氏を研究代表者とする科研報告書『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究―日本宗教の歴史的・構造的特質の解明のために―』（研究成果報告書 二〇〇九（平成二二）年度―二〇一一（平成二三）年度科学研究費補助金基盤研究（B））が出された。鰐淵寺関係文書目録から始まって、境内の建造物、庭園、発掘調査、植生、道路などがとりあげられ、次いで鰐淵寺・清水寺座次相論や青蓮院との本末関係、寺院法として著名な「正平式目」などの論文が収録され、最後に美術・工芸品が紹介されるという、文献・考古・自然など多様な角度から検討された総合的な研究成果であった。本報告書中の杉山巖論文では、座次相論に関する文書名や推定年代などが定められ、相論の経緯について大幅に理解が修正された。

同年五月には、末柄豊氏の校訂による『京都東山御文庫所蔵 延暦寺文書』（八木書店、二〇一二年）が出され、鰐淵

寺・清水寺座次相論がいかに朝廷・延暦寺と密接にかかわって展開してきていたかが明らかになった。同年、一〇月、島根県立古代出雲歴史博物館で、『戦国大名尼子氏の興亡』（島根県立古代出雲歴史博物館、二〇一二年）と題した企画展が、開催された。尼子氏の栄枯盛衰を西国の政治情勢や経済的側面と絡めて展示がなされ、展示史料から尼子氏による杵築大社や鰐淵寺をはじめとする出雲国内寺社勢力の改編についても触れられた。これは、二〇〇九（平成二二）年度―二〇一一（平成二三）年度にかけて島根県古代文化センターで実施されたテーマ研究事業によるもので、その研究成果は翌二〇一三年三月に、『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』（島根県古代文化センター、二〇一三年）で研究成果報告書としてまとめられた。

二〇一三年七月には、科研調査で改めて価値が見出された鰐淵寺の文化財が、特別展『もう一つの出雲神話―中世の鰐淵寺と出雲大社』（出雲弥生の森博物館、二〇一三年）で一般公開された。

二〇一四年九月、佐伯氏による単著『中世出雲と国家的支配―権門体制国家の地域支配構造―』（法蔵館）がまとめられ、中世出雲地域の歴史について、杵築大社と権門体制国家との関係を中心に論じられた（のち二〇一七年に、吉川弘文

館の歴史文化ライブラリーから『出雲の中世 地域と国家のはざま』としても発刊された）。翌一〇月には、島根県立古代出雲歴史博物館の企画展として、『修験の聖地 出雲国浮浪山鰐淵寺』（島根県立古代出雲歴史博物館、二〇一四年）が開催された。新発見や初公開の仏像も並び、数十年ぶりに鰐淵寺文書がまとめて公開された。

二〇一五年正月、京都国立博物館で特別展『山陰の古刹 鳥根・鰐淵寺の名宝』（京都国立博物館、二〇一五年）が開催され、鰐淵寺所蔵の仏像が紹介された。同年三月には、『出雲市の文化財報告28 出雲鰐淵寺 埋蔵文化財調査報告書』（出雲市教育委員会、二〇一五年）が出された。これは、

二〇〇九年―二〇一四年まで行われた出雲市教育委員会を調査主体とする発掘調査にもとづくものである。従来、鰐淵寺は北院（唐川地域）と南院（大寺谷もしくは別所地域）とが境内の別地域に存在し、南北朝期の両院統一により現在の伽藍の骨格が成立したと考えられてきた。しかし、発掘・分布調査から、もともと北院・南院ともに別所の中核地域である根本堂地区にあり、南北朝期の両院統一でその中間に根本堂が建立されたことが明らかになった。寺史を語る上で貴重な、鰐淵寺の創建と境内の造成過程が考古学の成果によって判明した。

こうした成果が重ねられた結果、二〇一六年三月には、鰐淵寺境内が国史跡に指定された。

以上、鰐淵寺にかかわる調査・研究は、ここ二〇年ほどで格段に進展した。鰐淵寺所蔵文書や旧蔵文書、関係文書だけでなく、美術・工芸品、埋蔵文化財、自然の調査もおこなわれ、出雲国内の杵築大社や周辺寺社、また戦国大名尼子氏にかんする研究の進展へと広がりを見せている。今回の二冊の史料集の発刊もこうした経緯の中でなされたものであり、長年、鰐淵寺を守られてきた方々、また調査に携わられた自治体や研究者の方々に敬意を払いたい。

さて、井上氏は、出雲鰐淵寺文書二冊の史料集刊行の意図を、次のようにまとめている。

（一） 鰐淵寺文書のより正確な情報を読者に伝える。

（二） 寺外の関係文書を網羅的収集し、一括して読者に提供する。

（三） 寛文七年正月の「神仏分離」までの時期区分とすること、鰐淵寺の歴史を明確にする。

まず、（一）について、鰐淵寺には、中世文書四〇〇点以上が残っており、文書原本が多く、保存状態が良好であるという。各掲載史料の文書名は、『鰐研』を再点検し、各文書の発給者の役職や人名を明らかにし、様式論の観点から文書

名が付けられている。例えば、「龜山上皇院宣」(『鰐研』二二二号)が「後深草上皇院宣」(第一部一九九号)に、「足利高氏祈禱状」(『鰐研』五六号)が「足利尊氏御判御教書」(第一部五二二号)に、「某氏員盛・同員興連署状」(『鰐研』二二四号)が「六角氏家臣永田賢興・進藤賢盛連署奉書」(第二部二二二号)になどである。とくに、天文二十四年(弘治三年)にかけて本格化した「鰐淵寺・清水寺座次相論」関係文書に於いて、正確な年次比定や発給者の特定が、科研報告書以外ではじめてなされている。また、史料の年次比定が可能な限り行われ、内容との関連性から年未詳文書も関連の箇所に取りめられている。さらに、鰐淵寺文書は、裏打ち・成巻されず中世・近世の古い形態のまま原文書が残されているのが特徴であるが、その史料の形態や法量、包紙や切封、封式の状態が、情報として記されている。中世の古文書の様式論や形態論を学ぶ上でも、有益な史料群であることがわかる。

次に、(二)について、井上氏は、島根県内における自治体史の史料編纂の少なさを危惧し研究基盤を整える意味で、島根県立図書館に所蔵されている戦前の『島根県史』編纂のための史料調査で作成された影写本・謄写本を活用し、今回の第Ⅱ部を編纂している。島根県内のまとまった中世史料の活字化については、『鰐研』の史料集以降、それほど多くは

するところが多い。

(三)については、中世の寺社が世俗政治権力とどのような関係をたどってきたかという問題を考える上で重要な時期区分である。中世以来の鰐淵寺と杵築大社との密接な関係が断絶し、鰐淵寺内での社殿の位置付け、杵築大社内での仏教施設の撤去がなされるのが、一七世紀中頃であるという。この時期区分での史料集刊行は、寺社の近世化を考えていく上で、受容な示唆を与えている。

最後に、一部の文書の年次比定と未収録関係文書について数点指摘させていただく。まず、『天文二四年(二五五五)五月一五日付「延暦寺楞嚴院別当代書状」(I-163号文書)であるが、島根県立図書館所蔵のマイクロフィルムを確認したところ、「五」ではなく「十一」と読むことが出来た。その結果、弘治元年(一五五五)一月一五日付「延暦寺楞嚴院別当代書状」となる。この日付と文書の内容から、鰐淵寺を支持する延暦寺西塔(北谷の正教坊詮運ら)によって延暦寺横川にも鰐淵寺支持を取り付ける動きが、弘治元年一月月中旬から始まっていたことが判明する。また、II-137号文書の網文で、「十一月二八日 満蔵院直運、鰐淵寺正教坊法印坊に対し、鰐淵寺のことについては先日事情を聞き、了解したので安心せよと伝える。」とあるが、「正教坊」は出雲国鰐

なかった。例えば、『新修島根県史 史料編1古代・中世』(島根県、一九六六年)に収められた鰐淵寺文書は、『鰐研』を典拠とし十九点のみの収録にとどまっている。井上氏らによる『大社町史 史料編 古代・中世』(大社町、一九九七年)を契機として、『六道町史 史料編』(六道町、一九九九年)、『出雲日子史料集』(広瀬町教育委員会、二〇〇三年)、『島根県古代文化センター調査研究報告書24 佐草家文書』(島根県古代文化センター、二〇〇四年)、『松江市史 史料編3 古代・中世I』(松江市、二〇一三年)、『松江市史 史料編4 中世II』(松江市、二〇一四年)など着実に史料集の整備が進められてきている。今回の両書もこうした流れに位置づくものである。実際、第Ⅱ部の史料集には、「千家家文書」・「晋叟寺文書」・「稲田家文書」・「法王寺文書」など未活字の史料が多数、収録されている。第Ⅱ部収録の史料から、鰐淵寺が杵築大社をはじめ(杵築大社国造家や上官家の文書など)、出雲国内の寺社(清水寺・岩屋寺・法王寺・神魂神社など)へいかに影響を及ぼしていたのかをみてとることが出来る。なお、欲を言えば、第Ⅱ部の史料集に収録された各史料群の簡単な解題と、各史料を所蔵する寺社等が鰐淵寺とどのような関係にあるのかを示していただきたかった。ただし、これは両書刊行をもとに、今後の研究の進展に期待

淵寺ではなく延暦寺西塔の寺坊である(正教坊詮運法印 舜公碑銘「天台霞標三編卷之三」『大日本仏教全書』一三五卷)。そして、両書未収録の関係文書として、鰐淵寺・清水寺座次相論について触れた、弘治二年一月二日付三好長慶宛三条西公条書状写(『古簡雑纂』『戦国遺文 三好氏編』第一卷、東京堂出版、二〇一三年)がある。

両書は、鰐淵寺や杵築大社をはじめとする出雲の中世(近世初期)の政治史・宗教史を語る上で欠かすことのできない史料が包括的に翻刻され、現在の研究の到達点ともいえるべき解説(五六頁にもわたる)も付けられた労作である。出雲国の地域史や中世の一宮制、地域の顕密寺院のあり方、延暦寺との本末関係、寺院と神社の関係、寺社の近世化など、論点に富んだ興味深い文書群である。ぜひ多くの方々に一読いただきたい。

(二〇一五年八月刊、法蔵館、A5判、

三九五頁、一三〇〇円+税

二〇一八年一月刊、法蔵館、A5判、

四七八頁、一四〇〇円+税)

(大垣市教育委員会 うえしま やすひろ)

## 『天台談義所 成菩提院の歴史』

芹口 真結子

滋賀県米原市柏原に所在する寂照山成菩提院（天台宗）は、桓武天皇勅願所として伝教大師最澄が建立したとの伝承が存在する。中世には、中興開山貞舜・二世慶舜・三世春海（柏原三世と称される）が談義所として同院を発展させていった。談義所とは、「僧侶が学問、修学を行った学問所で、仏教の教理や宗門の教義について講説する所」（本書一五頁）であり、成菩提院は、仙波談義所（武蔵国）、長南談義所（上総国）に並ぶ著名な談義所の一つに名を連ねていた。また、有力な灌頂道場も兼ねており、これは談義所としては稀な事例であったという。

かかる歴史を有する成菩提院には、貞舜をはじめとする学僧たちが集積した貴重な聖教や、中世から近代までの膨大な古文書が所蔵されている。成菩提院文書は、本書の記述によ

れば、東京大学史料編纂所による明治一九年（一八八六）

明治二一年にかけての滋賀県における史料探訪のほか、坂田郡役所の『近江坂田郡志』（一九一三年刊）編纂、坂田郡教育会の『改訂近江国坂田郡志』（一九四一―一九四四年刊）編纂での調査が入っているなど、早くからその存在が紹介されていた。一九七〇年代には、同院第五九世の尾上寛仲による研究（尾上「柏原談義所の成立」『叡光』三〇、一九七三年など）が発表されている。その後、福田榮次郎を中心とする調査団が中世文書と近世文書の調査・整理を行い、一九九九年に『成菩提院文書』の総合的研究（福田「明治大学人文科学研究所紀要」四五）として、その調査成果がまとめられた。また、松本公一・大島薫・曾根原理などによる聖教史料調査も進められ、さらに曾根原理・青柳周一・朴澤直秀な

どによって近世文書を主な対象とした調査が行われている。

筆者も、二〇一六年から右の近世文書調査に参加している。本書は、以上の史料調査の成果をベースとして、成菩提院が歩んだ歴史と、所蔵史料を検討する内容となっている。以下、本書の内容を紹介していきたい。

本書の構成は全三部からなり、その内容は次の通りとなっている。各章は、国文学・歴史学・文化史学・美術史学の研究者が分担で執筆している。

- 第一部 通史・伝承編
- 一、貞舜と談義所の成立
  - 二、二世慶舜と西山流灌室の成立
  - 三、三世春海以降の学問と教学
  - 四、成菩提院聖教にみる寺院ネットワーク
  - 五、戦国期から信長・秀吉時代にかけての成菩提院
  - 六、近世初期の成菩提院
  - 七、近世の末寺
  - 八、兼帯寺院としての成菩提院
  - 九、六如慈周の活動
  - 十、豪恕・円体の活動
  - 十一、幕末・明治初期の動向

## 十二、成菩提院の伝承

## 第二部 文化財編

はじめに

- 一、指定文化財
- 二、中世文書
- 三、中世聖教
- 四、近世文書
- 五、近世聖教

## 第三部 資料編

- 一、主要典籍一覧
- 二、年中行事
- 三、略年表

「第一部 通史・伝承編」では、中世から明治初期にいたる成菩提院の歴史や、僧侶の活動、末寺の概要などが論じられている。中世期に関しては、成菩提院が談義所として成立していく過程を、成菩提院の基礎を形づくった貞舜・慶舜・春海の学問と教学のあり方や、土地集積の様相から整理している。中世学僧の修学の仕方、成菩提院の談義所としての活動を把握することが可能となっている。戦国〜織豊期にかけては、成菩提院が諸大名と交渉し、寺院の存立を図っていた

ことなどが、所蔵史料などの分析をもとに示されている。

近世期については、関ヶ原合戦における成菩提院の動向から書き起こされ、家康による寺領安堵、延暦寺西塔正観院との兼帯のあり方（天海→俊静まで。時期としては寛永六年（一六二九）→寛保元年（一七四一）となる）、代々の住職による諸活動などがまとめられている。寺院末寺の一覧表が掲載されていること、本末関係の変遷が述べられていることは、近世期の寺院本末関係を検討する上で有意義な成果である。幕末・明治初期については、神仏分離や寺社領の上知といった政治・社会状況の大きな変化に対し、成菩提院がどのように対応したのか、新任職孝健の着任をめぐる檀家・末寺・延暦寺の動向を紹介しながら検討されている。最後に、成菩提院に残る伝承について紹介がなされ、それらの伝承から読み取れる成菩提院に対する人々の意識について分析が加えられている。

「第二部 文化財編」では、まず、「一、指定文化財」において、成菩提院が所蔵する国指定・県指定の文化財（浄土曼荼羅図、大般若経など）の図像と解説が付される。続く「二、中世文書」の部分では、土地売券や帳簿類、織田信長禁制や豊臣秀吉の朱印状、石田三成の掟書十三条などが紹介され、大部でない史料については翻刻も掲載されている。「三、中

史料、開山忌に行われた法華八講や徳川家康の忌日に合わせて執行された東照宮八講に関する史料（四一〇「法華八講関係」、慶応四年（一九六八）に成菩提院が新政府宛に提出した寺院の沿革・寺領関係の史料などが存する。これらは、他の媒体における翻刻・紹介を再録したものが中心となっている。今回、本書に収録されることにより、利用の便宜が図られている。

他方で、新たに全文翻刻された史料も数点加えられている。例えば、四一九「天真法親王令旨」、四一二「成菩提院栄応書付（写）」、四一四「公遵法親王令旨写」などである。このうち、とりわけ興味深い史料として「成菩提院栄応書付（写）」を挙げることができる。栄応は、成菩提院三二世住職で、本史料は、延暦寺執行部に対して出された書付である。その内容は、天海の兼帯以降、成菩提院に独立した住職が置かれなくなったため、官位昇進が中絶してしまったこと、自身が住職に任命された際に、輪王寺門跡から同院を格式ある寺院の住職が隠居後に入る寺（「移転所」）に設定されていた、住職の官位昇進の望みがなくなり、弟子の育成にも支障を来していることを歎くものとなっている。

本史料については、第一部八章「兼帯寺院としての成菩提院」の「画期となった栄応」に関する論述をする上での根拠

「世聖教」に関しては、貞舜ら歴代住職が集めた聖教類や、第二世慶舜・第三世春海・第四世明舜の弟子の交名が記載された「慶舜・春海弟子分交名」などが紹介される。本章の冒頭に配置された「概要と特徴」や「貞舜関係史料からわかること」では、中世の僧侶が諸国の寺院をめぐるがら修学をしていたことについて、成菩提院所蔵史料だけでなく、各機関に所蔵されている史料も用いて跡づけられている。談義所に止錫していた中世僧侶の活動を歴史的に位置づけるものとして参考になる。

成菩提院には様々な種類の近世史料が伝来しているが、「四、近世文書」の部分には、そうした同院近世史料群の特徴が反映された多種多様な史料が翻刻・掲載されている。具体的には、四一二「成菩提院宛行状写」、四一三「成菩提院法度」、四一三「人別改帳」といった、支配関係や寺内・門前の人別関係などの基礎史料、成菩提院末松尾寺による青木大梵天王の祭祀をめぐる滋賀院（延暦寺の末寺統制機関）とのやりとりが記されている四一三「青木大梵天王一件」、四一一「谷波山観音三十三年開帳覚」、四一五「下知状」、四一六「谷波山十二面観世音菩薩像出開帳関連」といった、開帳をめぐる成菩提院と谷波山華嚴寺（成菩提院末寺で、世間にその名が知られていた）とのやりとりに関する

とされた史料で、成菩提院の寺院経営や中央の天台教団との関係性を窺える好史料であることが読者に提示されている。右からは、地方末寺の歴史認識も窺うことができる。近世の寺院が自坊の歴史をどのように把握していたのか、そして、醸成された歴史意識がどのようなかたちで表出してくるのかといった点については、近世寺院史研究を深めていくために、今後、他の地域寺院の事例なども相互に紹介・比較・検討していくことが必要となろう。

「五、近世聖教」では、近代聖教も含めて大量に存在することから、そのなかから特徴的な史料群である龍宝院旧蔵聖教を取り上げ、紹介をしている。龍宝院は、近江国坂田郡柏原宿にあった真言宗当山派修験で、成菩提院に入っている聖教は一九世紀に作成された史料が大半を占めるとされる。各種の札や護符類、明治十年～四十年代までに村方で実施した祈禱に関する記録など、近世後期から近代までの修験寺院の活動が分かる史料が残されており、興味深い。なお、古文書については、岡嶋家（明治期の龍宝院を継承した全味の後裔）に伝来しているという。

「第三部 資料編」には、中世の典籍類の目録、現在の成菩提院が開催している年中行事の一覧、年中行事の関連史料として、近世期の年中行事を記載したものが四点、翻刻・掲

載されている。最後に、成菩提院に関する略年表が収載される。

以上が、本書の概要である。本書の特徴は、歴史学・国文学・美術史学・文化史学の研究者によって編まれていることにある。本書の内容を紹介するなかで縷々述べてきたように、成菩提院には中世から近代までの長期にわたる様々な史料が所蔵されているため、学際的な観点からの分析が要請される。本書は、こうした史料群がもつ個性を踏まえた構成がなされている。

近年では、近世化論、一九世紀論など、移行期における社会変動に注目する研究が盛んである。また、例えば中世寺院史研究においても、近世宗教史研究の成果との架橋を目指す新たな動きを見いだすことができる（芳澤元「中世後期の社会と在俗宗教」・近藤祐介「一五〜一七世紀における門跡寺院と地域社会」、ともに『歴史学研究』九七六、二〇一八年所収）。本書の出版は、かかる研究動向から見た上でも重要性をもつ。今後、近世〜近代史料と聖教の調査・整理がさらに進むことによって、諸分野研究の進展に資する成果が生み出されるだろう。

（二〇一八年二月刊、A5判、四五四頁、

七〇〇〇円＋税、法蔵館）

（一橋大学大学院社会学研究科特任講師 せりぐち まゆこ）

中西直樹著

## 『近代西本願寺を支えた在家信者——評伝 松田甚左衛門——』

辻 岡 健 志

仏教史といえば、往々にして僧侶を主人公にして描かれることが多い。こと近代に至っては、『全集』の出ているような「思想家」としての僧侶を研究する傾向が顕著であって、西洋化のなかでの仏教思想の有り様が重視される。僧侶でも著名な人物に限られているのだから、ましてや在家信者となるとほとんど関心が向けられないのも無理はない。

それでも有元正雄のように、近代化のなかでの門徒のエトスを論じた研究もあるが（『真宗の宗教社会史』吉川弘文館、一九九五年）、集団分析であって個人の役割はなかなか見えづらい。問題はこれまで個人を取り上げ、教団組織や僧侶との関係などに則して、近代仏教史という大きな筋書きのなかで論じたものはなかった。

ここで取り上げる中西直樹著『近代西本願寺を支えた在家

信者——評伝 松田甚左衛門』（以下、本書）は、以上のような研究状況のなかで一在家信者である松田甚左衛門の生涯に焦点を当てて、開明的な近代仏教のイメージを覆そうとする野心的な試みである。甚左衛門は一九世紀後半の激動期の西本願寺を支え続けた在家信者で、これまでほとんど知られることなく、今日に至っている。管見の限りでは、過去にせいでい「地味な世話人としての念仏者の一群」である「新妙好人」の一人として紹介される程度であった（鈴木宗憲「近代社会形成と宗教的人間像」〈同『日本の近代化と「恩」の思想』法律文化社、一九六四年〉、一九〇頁）。

松田甚左衛門という人物は、著者が本書の元となる論文を著すまで（『近代西本願寺教団における在家信者の承譜——弘教講、顕道学校、そして小川宗——』〈福嶋寛隆編『日本思想

史における国家と宗教』上巻、永田文昌堂、一九九九年）、本格的に取り上げられることはなかった。本書は初めての松田甚左衛門の評伝でありながら、単なる伝記に止まることなく、僧侶を主人公とする仏教史のスタンダードに書き換えを迫る無二の書である。

以下では、本書の目次（節以下略）を示し、各章の内容を紹介した後、評者の感想を少しかり述べたいと思う。

はじめに

第一章 幕末・維新期の護法活動

第二章 弘教講取締としての活躍

第三章 顕道学校と各種教化・教育事業

第四章 本山との離別と小川宗

参考資料／あとがき

まず、第一章では幕末・維新期という激動期の西本願寺を支えた、松田甚左衛門の活動が叙述されている。甚左衛門は、一八三七（天保八）年に兵庫県北部の浜坂に生まれ、生家は代々半農半漁を生業としていた。熱心な篤信家であったため、家督は継がず、親鸞旧蹟巡拝の旅に出たという。一八六八（慶応四）年に鳥羽伏見の戦いが始まると、朝廷から御所の

警固を命ぜられた西本願寺のために甚左衛門も参加するなど、本山に尽くした。また、甚左衛門は一八六八（慶応四）年以降、進められる教団改革を目の当たりにする。この時、本山宗政を僧侶に任せることでの弊害を感じ、在家信者の登用を唱える僧侶利井明朗（撰津常見寺）との交流を持つようになる。利井との出会いは、その後の伏線にもなっており、甚左衛門にとって重要な人物の一人になる。

また、近代仏教史のなかでも必ず取り上げられる廃仏毀釈や真宗の大教院分離運動などについても、甚左衛門は当時に見聞した所感を述べている。廃仏毀釈の激しさを体感する一方、富山藩での廃仏については真宗門徒の腐敗にも原因があると指摘する。また、大教院分離運動は島地黙雷ら開明的僧侶の活動ばかり知られるが、「愛山護法」のために甚左衛門が豊岡（現兵庫県豊岡市）に戻って、信徒の説得工作に励んだ様相が描かれる。その豊岡では一八七五（明治八）年に甚左衛門らが腐心して豊岡説教所を落成するなど、地域での活動にも論及する。これまで幕末・維新期の在家信者の動向はほとんど知られておらず、これらの事実は興味深い。

第二章では、甚左衛門が新築した豊岡説教所に続き、組織した弘教講という仏教結社の活動を取り上げている。弘教講は西本願寺門前に詰所（本部）を設けて、丹後・丹波・但

馬・因幡・伯耆の五ヶ国を活動範囲とした。全国的に教会・結社の活動が活発になるなか、法主明如は弘教講に消息を出して、その活動に期待を寄せていたという。弘教講はその後、一八七九（明治一二）年に豊岡に設けられる僧侶養成機関・布宣教校の建築支援や、同年に落成する大教校（龍谷大学の前身）の校舍建築のための労働奉仕などの活動を展開した。また、東京・築地別院の再建にあたっては、利井明朗からの要請で工事の手伝いを行うなど、活動範囲は多岐にわたる。

東京で過ごす間、一八七九（明治一二）年には北畠道龍を中心に改正寺務所を東京に置く、いわゆる東移事件が起きると、弘教講も巻き込まれる。紆余曲折を経て結局、寺務所の東移は挫折するも、弘教講は他の末寺僧・在家門徒とともに、本山に公選議会開設を要求する。参加が認められたのは末寺住職のみで、在家信者が含まれることはなかった。甚左衛門がこうした活発な護法活動を展開していたのは、急速な西洋化に危機感を抱いてのことであったといえ、教団運営に関与しようとする動き自体これまで注目されてこなかった事実であらう。

第三章では、弘教講の解散後の甚左衛門の活動について明らかにしている。自由民権運動が活発化するなかで、在家信者の積極的活動が政府によって危険視されたため、教団とし

ても教会・結社を解体する方向へ転換して、一八八二（明治一六）年に弘教講も解散を余儀なくされた。その後、弘教講の事業は学校経営へと形を変えて継承され、一八八五（明治一八）年に顕道学校を開設する。同校は本山からの管理から独立した、在家信者による在家信者のための仏教主義学校であり、「近代仏教教育史上においても例を見ない」という（九六頁）。ここで、著者は今日でも僧侶養成が主であるため「俗人教育に主眼を置いた仏教主義学校が存続できなかったことに、近代仏教のつまづきの一因がある」（九五頁）との重要な指摘をしている。一八八九（明治二二）年には、教団の事情から廢校に追い込まれ、在家信者の主体的活動は頓挫してしまう。

その後も、僧侶だけでなく一般俗人に向けた仏教書を刊行するため、顕道書院施本会を設立したほか、閉鎖した顕道学校校舎を顕道学館と名付け、少年教化・女性教化事業に従事した。甚左衛門はさらに女子教育の重要性が高まるなかで、一八九九（明治三二）年に顕道女学院を開設した。だが、ここでも共同創立者である甲斐和里子と西本願寺との関係をめぐって対立してしまい、結局廢校になったとされる。その他、甚左衛門は報恩同志会という団体を結成して、積極的に教団運営への参加意欲を示すも、その要求が受け入れられること

はなかった。

第四章では、甚左衛門の心境に大きな変化が起こり、本山と離別する様子が明かされる。本書のハイライトともいえるべき章で、甚左衛門の苦悩が描き出されている。本山から次々と懇志を要求し、執行部では腐敗が横行するなか、甚左衛門は自らの改革要求にも耳を傾けようとしなかったことから、本山への疎外感を受けるようになる。かねてから親交のあった政治家品川弥二郎からも忠告を受けるも、本山との溝は埋めがたく、多年私淑してきた利井明朗へ西本願寺との訣別を宣言したという。

その後、小川丈平（号独笑）という篤信家と出会い、教団の現状に対して批判的な小川の実感に感銘を受けた。甚左衛門は、小川の法話集『念仏相続要文拾集』を出版したほか、念仏結社「小川宗」に深く関わってゆく。だが、教団からは変革を迫り、必ずしも懇志を要しない主張を看過しえず、異安心という烙印をもって排除されたのである。その後も、一九二三（大正一二）年、甚左衛門は顕道学校の卒業生と協力して、在家信者のための新たな教化の場「顕道会館」を設けるも、会館間もない一九二七（昭和二）年に息をひきとった。以上、本書の内容を見てきたように、松田甚左衛門という一在家信者の生涯から、これまでの近代仏教史や本願寺史が

ことができない」という（六頁）。一次史料に期待できないなか、回顧談が重要な史料となったことが分かる。だが回顧談には往々にして、我田引水や自己賞賛などが含まれており、能弁で興味深い史料だけに、他の関係者の史料との照合などもう少し慎重な作業も求めてしまいたくなる。

第二に、在家信者という視座についてである。本書では、教団組織の基盤を説明するうえで、在家信者は物心ともに支える存在として重要であることを示している。近代仏教史のなかで未開拓の分野を切り拓いたものとして評価できる。ただ、著者は「在家信者」という語を一貫して用いているが、当時や今日でも用いられる「門徒」や「信徒」と表現される場合とどう異なるのか、少々気になるところである。

また、甚左衛門の評伝という性格上、在家信者論まで論及されていないが、在家信者間の横の繋がりに気になるところである。例えば、西本願寺には「法義篤信」の地方名望家などが本山の財政面に参与する、本山勘定という任がある（『本山勘定任務条規』明治三六年七月『本山録事』同年八月、龍谷大学大宮図書館所蔵）。分かっているところでは、近江商人の初代伊藤忠兵衛が就任しており、伊藤もまた大日本仏教慈善会財団の創立など本山の手がける事業に携わっている（小川功・深見泰孝「近江商人・初代伊藤忠兵衛のリス

描かなかったもう一つの歴史が明らかにされている。一般に評伝の場合、時代を見通すのに長命であることが要件の一つであろうが、天保から大正までの九〇年にわたり生きた甚左衛門の場合は、十分それを満たしている。幕末・維新の激動期から西本願寺が近代化してゆく道程とほぼ重なることも、評伝としての質を高めているといえよう。

本書を通読して、甚左衛門の教団を支える気持ちは人一倍強く、支援してきたにもかかわらず、否だからこそ、教団に絶えず翻弄される苦悩に気づかされる。教団側からの視点では分からない、知られざる歴史が解き明かされるにつれ、読む者は引き込まれる。一般向けという本書の性格からして平明な筆致で叙述されたことで、一気呵成に読むことができる。本書で引用される甚左衛門の回顧談（『中外日報』一九一五（大正四）年掲載の「五十年前の本願寺」、「本願寺と訣別後の私」）も読みやすく、彼の置かれた時代状況を説明するのに分かりやすいものとなっている。

最後に、評者が本書を読み進めて気になった点を二つ述べたい。まず第一に、典拠となる史料についてである。本書の読みやすさと裏腹のことであるが、回顧談がふんだんに用いられている。というのも著者が曰く、甚左衛門の「膨大な資料は、かつて顕道書院に残されていたが、現在は散逸して見る

ク管理と信仰の相克」（『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』三九号、二〇〇六年、五八頁）。信心深く、本山を支えようとする姿勢は、甚左衛門ともさして変わらない。甚左衛門は、伊藤のような本山側の人物をどう見ていたのだろうか。こうした点は、在家信者の研究を進めるうえで、課題の一つに挙げられるであろう。

さて、冒頭でも述べたように、今日、松田甚左衛門を知るものは多くない。知名度の低さもあって、本書表紙の写真にも使用されている甚左衛門の胸像の去就が定まっていないう。一般的に史料や文化財について、知らないというだけでその価値を顧みず、散逸することも少なくないと仄聞する。本書刊行を機に、歴史に埋もれた松田甚左衛門に少しでも関心が示され、胸像保存の気運が高まってゆくことを、評者も願うばかりである。いずれにせよ、本書は近代仏教史研究が見落としてきた在家信者の分野を切り開くものとして、大きな一歩となる有意義な書である。

（二〇一七年九月刊、四六判、一六六頁、

一九〇〇円＋税、法蔵館）

（宮内庁書陵部図書課宮内公文書館 つじおか たけし）